

2020年3月29日
東京聖三教会

エゼキエル書 37:1-3, 11-14
ローマ書 6:16-23
ヨハネ 11:17-44

わたしは復活であり、命である



The dead man came out

日本聖公会東京教区
東京聖三一教会

2020年3月29日
東京聖三教会

エゼキエル書 37:1-3、11-14
ローマ書 6:16-23
ヨハネ 11:17-44

わたしは復活であり、命である

司祭マリア・グレイス笹森田鶴

預言者エゼキエルは、主の強烈な霊によって突然連れ出され、ある谷の真ん中に降ろされます。そこはかつて戦場であったのか、もしくは何らかの災害や出来事があったのか、一度にたくさんの方が亡くなられた場所でした。しかも亡くなってから随分と時間の経過した、枯れきった骨でいっぱいになっている場所でした。これらの骨は、不本意に亡くなっていった人びとの骨でした。

主はエゼキエルに、これらの枯れた骨が生き返ることができるか、と問います。そんなことができるのでしょうか。しかし主はエゼキエルにこれらの骨に向かって預言し、生き返らせるようにと促します。エゼキエルが主の言葉の通りに枯れた骨に命じると、枯れた骨がカタカタと音を鳴らして集まり始め、体が組みあがっていきます。更に、その組み上がった体に霊を吹き込むと、単なる形でしかなかった体が生きて自分の足で立ち上がり、大いなる集団となっていました。

この幻(ビジョン)は、バビロニア帝国によって捕囚の民となり、すべてを失って絶望の淵にあったイスラエルの民、そしてその渦中において実によくその現状を理解しているエゼキエル自身に与えられたものでした。生きている人が、「わたしたちの骨は枯れた」と言うほどの状況が起こっていました。「わたしたちの望みはうせ、わたしたちは滅びるしかない」と言わなければならない人びとがいました。しかしこの幻は、起き上がることもできずにいたイスラエルの民を再び起き上がらせる力となったのです。しかも神様は、「わたしはお前たちの墓を開く。わが民よ、わたしはお前たちを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く。」(エゼキエル 37:12c 以下)と約束までしてくださいました。

神様は命を起し、造り上げるお方です。エゼキエルの時代にはまだ明確な復活信仰は生まれていませんでした。それにも関わらず、希望なき状況において、たとえ人々が自分たちは枯れた骨のように何も残っていないと思ったとしても、神様はみ言葉によって人びとを再び立ち上がらせ、新しい命を造り出すことのできるお方であることをこの物語は記しています。神様は生きておられ、死の絶望からも人びとを立ち上がらせてくださるのです。この幻を、時代を越えて目の当たりにした女性たちがいました。それが今日の福音書です。

マルタもマリアも、ラザロの死によって嘆きと悲しみの只中にいました。そしてそれぞれが主イエス様にその心情を同じ言葉で語ります。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」(ヨハネ 11:21,11:32)。

あなたが復活についてお話されていたことは知っていますが、一体そのこととラザロの死とは何か関係あったのでしょうか。わたしたちの大切なラザロは死んだのです。あなたが今ではなくあの時いっしょにいて

さえくたされば…。心の奥から絞り出すような言葉です。

その思いに呼応して、主イエス様はマルタにご自身を示されます。「わたしは復活であり、命である」(ヨハネ 11:25a)。主イエス様ご自身は、この世では実は殺されていく道をたどられます。殺される主イエス様が復活と命であるというのは、この世の感覚では矛盾している宣言にも聞こえます。しかしその逆説的なことこそが主イエス様にとっての真実でした。そして主イエス様はマルタに語り続けます。「わたしを信じるものは、死んでも生きる。…。このことを信じるか」(ヨハネ 11:25b,26)。

この頃の人びとの多くは、サドカイ派を除いておおむね復活の信仰を抱いていました。それでも「死んでも生きる」という表現は、どのようにそのことを受け止めるべきか迷うはずです。しかし主イエス様から問いかけられたマルタは、「はい、主よ。あなたがこの世に来られるはずの神の子、メシアであると信じております」(ヨハネ 11:27)と告白します。ヨハネ福音書における非常に重要なマルタの信仰告白です。

しかしラザロはすでに墓に葬られており、駆けつけたマリアからも同じ嘆きの言葉を告げられ、またその様子を見て主イエス様は二度も心を強く動揺されます。そしてラザロの墓に到着するとその墓の入口の石をどかすように命じます。

「四日もたっていますから、もうにおいます」(ヨハネ 11:39)というマルタの断りの言葉は、主イエス様が命であり、復活であるということを感じると告白した同じマルタの直近の言葉です。どうしたらよいか分からずに混乱しているマルタに主イエス様は、信じるならば神の出来事を見ると言っただろうと、マルタ自らの告白を思い起こさせようとされます。そしてとうとうマルタもマリアも、ラザロの墓の入り口の石を取り除くこと

を拒まずに主イエス様にすべてを委ねた時、ラザロの復活を目の当たりにすることとなりました。

主イエス様によってラザロは絶望の死を象徴する墓から出てきます。イスラエルの民に神様が約束されたように、主イエス様は墓を開き、ラザロを呼び出し、埋葬から四日も経ち死の腐敗が始まっている肉体すらも再び起き上がらせたのです。「ラザロ、出て来なさい」という主イエス様の呼びかけの言葉によって、エゼキエルが見た枯れた骨の復活の幻が現実となった出来事でした。

この物語は、ラザロがそれから不死となったというお話ではありません。その後ラザロはその生涯を終えたことでしょう。しかし主イエス様は病によって不本意な死に至ったことへ、また人びとがそのために嘆き悲しんでいることへ心を動かされ、涙し、ご自身がもたらす命によって励まそうと奮闘してくださるお方であり、その姿こそが神様の栄光であることをこの物語は語ります。そして、主イエス様こそ、神様が与えてくださる復活と命そのものであることを人びとに信じさせ、神様の栄光の中に招くためにこの奇跡は記されています。

この物語を神様の出来事として読むわたしたちも、この物語を通してキリストこそ復活であり命であることを信じるように励まされています。絶望の只中にあっても、命を注ぎ、力を与えてくださるお方がわたしたちの神様です。不本意な死を迎えた人びとに神様は死によって終わらない新しい命を与えようと働いてくださっています。その死を嘆き「ここにいてくれさえすれば」と言わずとも、また「いつかきっと」でもなく、今まさにここで、時間と空間を越えて、神様はわたしたちが気づいていないありとあらゆる所でその働きをこの世界で遂行してくださっています。そのことを信じるようにとこの物語は促すのです。今、世界中に起こっ

ている悲しみと嘆きと不安の只中で絶え間なく希望を抱き続けることの厳しい状況の中であって、主は一人ひとりの命に目を留めてくださり、励まし、その命を大切に活かそうとくださっています。

その神様の呼びかけに応え、わたしたちは、人と人との間に生じている不安や疑いに替わり、愛と思いやりによってその間を埋めつくすものとなりたいと思います。人と人との間にこそ神様がいてくださるのです。その距離を今は保たなければならないのであれば、その分愛と思いやりを一層注ぎ込みましょう。この世界に命をもたらし続け、わたしたちの想像を遥かに越えて働いてくださる神様のみ業に信頼し、キリストこそ復活であり命であると大胆に告白し、人びとの間に神様の愛が満ちることを祈り、この大斎節の後半から復活日に向けての日々を過ごしてまいりたいと思います。